

## 主 論 文 要 旨

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	小島和貴
主 論 文 題 名： 近代日本の衛生行政構想と内務省の衛生行政 —長与専斎初代内務省衛生局長の構想を手がかりとして—				
(内容の要旨) 本論文は、長与専斎初代内務省衛生局長の構想を手がかりとして、内務省衛生行政に接近を試みるものである。すなわち長与専斎の衛生行政構想について医学等学術の「政務的運用」と、「官」と「民」の協調の推進の視点から接近し、同構想が内務省衛生行政の中でいかに扱われたのかを解明するものである。 長与は岩倉遣外使節団へ随行し、欧米において衛生行政の果たす役割が大きいことに注目した。その際、衛生行政を医学等学術を「政務的に運用」することで住民の健康増進を企図するものであると理解した。帰国した長与は医制の制定に関与し、衛生事務が内務省へ移管されたのちには、初代内務省衛生局長として医学等学術の「政務的運用」を進めるための環境づくりに邁進し、一方で犠牲者を出し続けるコレラをはじめとする伝染病対策に奔走するのであった。 長与の構想は内務省内外で一定の支持を集めることとなるが、さらに同構想を住民の健康増進につなげるためには、長与は市町村吏員や医師、警察官等「官」の側と住民の意識や活動等「民」の側とが相互に協調することが必要であるとする。そしてここでの構想は、明治23年の水道条例の制定を通じて具体化されていった。 長与専斎は、祖父も父も蘭学の素養をもった医家であったことから幼少より西欧の知識に触れる機会に恵まれていた。祖父の勧めで入塾した、緒方洪庵主催の適塾では、福沢諭吉の後を受け継ぎ塾頭にまでなった俊才でもあった。その長与の人生の転機となる出来事が明治4年の岩倉遣外使節団への随行である。長与はこの「一大使節団」の話を耳にすると、自ら希望して、欧米の医学教育制度の調査にあたる機会を得た。その最中、「サニタリー (sanitary)」、「ヘルス (health)」、「ゲズンドハイツプレーゲ (Gesundheitspflege)」等の言葉が耳に残り、調査を進めたところ、西欧諸国では衛生行政の重要性が認められていることが判明した。西欧諸国では、住民の健康問題に政府が介入することの正当性が認められていることに長与は注目したのである。 使節団の一員として欧州より帰国した長与は、文部省医務局長として「我が国衛生制度の濫觴」と評される医制の制定に関与し、以後、西欧諸国に範を採った医療・衛生制度を整えることに尽力する。そして医制の制定を実現した長与は、欧州で理解を深めた				

衛生行政の仕組みを整えるために、あるいは「国民一般の健康保護」を推進するために、初代内務省衛生局長に就任し、実に16年近くにわたり、自らの職責を担ったのである。

明治35年の長与の死に際して『医海時報』は、「我国健康保營の直接官衙を設け衛生局と命名したるは実に長与専齋翁其の人の力なりし」として、住民の健康増進に奔走した長与の功績を称えた。また内務行政に造詣の深い土方久元は、「『衛生』という言葉をきくと長与専齋を思い出す」とした。あるいは長与の腹心として活躍した後藤新平を岳父にもつ鶴見祐輔は「衛生局の歴史は、即ち長与の歴史である」と評し、さらに内務省OBを中心に編纂された『内務省史』は、「わが国の衛生行政の基礎をきずきあげたのは長与専齋であるといって過言ではない」と指摘する。こうした評価から判明することは、明治前期から中期にかけて、大問題となっていた伝染病対策をはじめとする国民の健康に関わる衛生問題に関心をもち、衛生行政全般にわたり長与が関与してきたということであり、衛生官僚として指導的な立場にあったことから内務省の衛生行政を語る際には無視することができない人物であるということである。そのため近年では再び長与の衛生行政構想に関心が寄せられるようになり、その構想を理解するにあたり、「警察」や「自治」、あるいは警察行政や地方行政との関係が重要であるとの指摘がなされるようになってきた。しかし、これまでの研究では、長与が自らの衛生行政構想の中にいかに警察行政と地方行政との関係性を取り込み、長与がいかなる立場から、いかなる衛生行政の仕組みを構築しようとしたのかについては明らかにされてこなかった。

明治30年、伝染病予防法の制定に漕ぎ着けた後藤新平との比較において長与を評価するならば、長与は衛生局長時代、自らの衛生行政構想を示す著作を出版等することがなかっただけでなく、その金字塔となるような記念碑的業績をもたないという逆説的な評価を下さざるをえない。しかしそうだからといって長与の評価が決して下がることはない。なぜならば、長与が築いた「衛生」という政策上のフィールドがあればこそ、後藤などその後に続く衛生官僚たちが活躍できたからである。内務省の衛生行政は長与がその形成に鋭意努力した「土壌」の上に展開されていったのである。

このように内務省衛生行政を語る際、長与は必ず指摘される人物であるが、一方で、いざそれを評価するとなると難しい官僚ともいえそうである。本論文において長与の功績を解明するため、長与の立場と行動を紐解きながら、内務省衛生行政の形成過程に接近することを試みる所以である。本論文において主に用いる資料としては「公文録」や長与の建言書、大日本私立衛生会等での講演録や内務省関連の諸記録、『中央衛生会年報』等である。

本論文は、第一部と第二部より構成される。

まず第一部では「医学等学術の『政務的運用』論の動向」として、「第一章 長与専斎と衛生行政—医学等学術の『政務的運用』の視座—」、「第二章 医学等学術の『政務的運用』論の具体化と内務省衛生行政の再編に向けた取り組み」、「第三章 医学等学術の『政務的運用』論の具体化と地方衛生行政の再編に向けた取り組み」より構成される。つづく第二部、「『官』と『民』の協調論の推進」では、「第四章 『官』と『民』の協調論の提唱」、「第五章 『官』と『民』の協調論の具体化—『衛生工事』を事例として—」より構成される。

第一章では、住民の健康増進を実現するに際して、長与専斎が欧米調査の際に理解した、医学等学術の「政務的運用」論に着目し、同構想が内務省の中でいかに評価され、支持されたのかを論証する。長与は医学等学術の知見を政策化し、地域住民に適用することで、住民の健康増進に資すると考えていたのである。

第二章では、医学等学術の「政務的運用」を進めることで効果的に健康増進を目指した長与の構想が、内務省の衛生行政の仕組みとしていかに具体化されたのか、そしてその具体化された仕組みは、内務省の内外でいかに取り扱われたのかを明らかにする。

第三章では、医学等学術の「政務的運用」を進めるために地方行政の文脈ではどのような動きがあったのかを解明する。

第四章では、第一部で解明された医学等学術の「政務的運用」論の省内外での取り扱いを受けて、同構想の効果をより高めるために長与が、「官」と「民」の協調を求め始めたことを取り上げる。ここでいう「官」とは政府の政策を推進する立場にある地方衛生吏員や警察官、医師等によって、そして「民」は、患者自身や患者を抱える家族、地域住民によって構成されるものである。

第五章では、「官」と「民」の協調を推し進めようとする長与の構想が、「衛生工事」が進展する中で具体化されていったということを論証する。

以上本論文より、住民の「健康保護」の増進を実現するため、医学等学術の「政務的運用」をいかに円滑に進めることができるかに注目した長与が、内務省内外の見解や具体的な制度改革に接する中で、自身の目的の達成に向けて「官」と「民」の協調が要求されねばならないとの見解を持つにいたったことが判明する。そして長与のこの「官」と「民」の協調を進めようとする構想は、「衛生工事」が進展する中で水道条例の制定という形で具体化されていったのである。